

図書だより

2025年1月号

三島高等学校 図書委員会



今回は、松本 秀樹 先生 です！

=簡単な自己紹介をお願いします=

今治東中等教育学校→新居浜工業高校→小松高校と渡り歩いてきて、この度ご縁があり三島高校に参りました。松本秀樹といいます。主に2年生の英語を担当し、卓球部の副顧問をしております。三島高校の皆さん、お手柔らかにお願いしますね！



=高校時代(大学時代)に感銘を受けた本を教えてください=

今道友信著「美について」(講談社現代新書 1973)

あれこれと迷った挙げ句、ちょっと「浮世離れた」本書を紹介しようと思います。

この本と出会ったのは、私が大学生の頃でした。大学生時代、「美」とは程遠い、やさぐれた赤貧洗うがごとの生活を送っていた私でしたが、いつも立ち寄る古書店で偶然に見かけた際に、なぜかタイトルの「美」に惹かれて、一冊50円で購入しました。

本書「美について」は、私たちの生活のなかにある、様々なものの「美」について論じた哲学の書です。同時に、私たちの精神の「美」について述べた倫理学の書でもあり、新書という小冊のなかに奥深い思索を封じ込めた一冊となっています。

当時、いろいろと挫折を味わい、荒んだ心の私でしたが、本書を読みながら、「もの」の美しさの彼岸に、人の「精神」の美しさを発見していく作者の「思考の世界」に触れることで、自分の暗い世界に光が差ししてくるような思いがしました。作者と一緒に、思索の階段を昇りながら、同時に自分の心も高められていく、そんな不思議な感覚を覚えました。

また一方で、この本は、今どきの本にありがちな、表面的な印象や断片的な知識のレベルに安住せず、合理的に思考を積み重ねて、目に見える世界を掘り下げながら、目に見えないアイデアの世界を開いていく、つまりは様々な知識や方法を総合し、新たな知を見いだしていくことの「かっこよさ」を教えてくれる一冊でもありました。

本書は、タイトルだけ見ると難しそうですが、実際は難解な用語を使わず、平易な日本語によって、一つ一つ思索を積み上げながら、「美」の本質に肉薄する稀有な一冊と言えます。

=みなさんに読んでほしい本を教えてください=

さらにマニアックな本として、小説家の大岡昇平(1909-1988)が書いた「野火」(1951)という作品を紹介します。

私が高校3年生の時、自宅の姉の部屋で偶然手に取ったのがこの作品でした。物語の最初の一行に目を落とした瞬間から、文章の異様な力に胸ぐらをつかまれ、作品のなかに引きずり込まれました。作品を読み終えた時には、言葉にならない「黒い」感情が心の中を渦巻いていました。すでに東の空が白み始める時間になっていました。

この作品は、太平洋戦争末期のフィリピンの熱帯の密林が舞台です。肺病を病み、部隊からも追放されて孤独に森を彷徨する兵士の「心の世界」が、迫力ある日本語で描かれています。体を侵され、一人密林を彷徨う極限状況に置かれた人間の孤独、愛、死、飢餓、人肉嗜食、そして「神」とは何かなど、重く暗いテーマが硬質な鋼(はがね)のような文体でごった煮にされている作品です。物語を読み進むにしたがって、日常的な理性や感性では到底捉えきれない奥深い異形の世界が広がっていきます。ただただ圧倒されるのみ！

この作品が描く世界は、私たちの平和な日常からは遠くかけ離れた世界ですが、ここには、まぎれもなく「人間の真実」が刻まれています。この作品を読み終わると、恐らく、自分のなかの「何か」が変わっているでしょう。超重量級の作品ですが、若い時代にぜひトライしてほしい小説です。

=三高生に一言！=

インドの聖哲ガンジーが残したこの有名な言葉が、今の三高生にはふさわしい！

Live as if you were to die tomorrow.

Learn as if you were to live forever.

明日死ぬと思って生きなさい。

永遠に生きると思って学びなさい。

松本先生、ありがとうございました！！



🎉🎉🎉 2年6組図書委員のおすすめ本紹介 🎉🎉🎉



『かがみの孤城』 筆：辻村深月

私が紹介したい本は「かがみの孤城」です。中学生のころは、学校に居場所がなく部屋に閉じこもっていた。ある日部屋の鏡が光りだし、ころは別世界へ吸い込まれる。おとぎ話のようなお城には、見知らぬ中学生6人が集められており、狼の仮面を被った少女(オオカミ様)が、ころたちにあることを告げるのだった。「この城の中に隠されているカギを探し出し、見つけることができれば一つだけ願いをかなえることができる」と。この本に出て来る中学生6人の絆が感じられる本です。一度読み始めるとどんどん物語に吸い込まれていきます。とても面白いので、ぜひ読んでみてください。



『魔力の胎動』 筆：東野圭吾

「魔力の胎動」という本は、五つの物語からなる連作短編集です。五つの物語にそれぞれ悩みを持った人たちが登場し、彼らの悩みを知る鍼灸師の工藤ナユタの前に、物理現象を予測できる不思議な力を持つ円華が現れ、彼女の協力によって次々と彼らの悩みが解決していきます。しかし、円華が協力していたのには、とある理由が。物語が進むにつれて、円華の本当の目的が明らかになっていく希望と共感の物語です。